橋俊綱の名園選考基準（「地形」と「眺望」）について

真 中 本

On The Criteria (geographical locations and prospects) for Selection of Gardens
which were Recommended by Toshitsuna-TACHIBANA in 11th c.

Makoto MOTONAKA*

摘要：橋俊綱は、11世紀後半修理大夫として作庭をはじめとする土木工事に精通し、それが故の自負心から白河上皇面前で上皇自らの作庭である鳥羽殿を退けてまで当時の名園の選定を行なった人物である。本研究では、彼が選定した庭園の位置比定を行い、それらの立地環境を分析する中で彼が選定の基準とした「眺望」「地形」の性格について明らかにする。

1. 序

橘俊綱は『今鏡』¹⁾や『宇治拾遺物語』,²⁾『愚管抄』³⁾などによると、藤原頼通の実子として出生しながらも、実母の祇子(進母娼)⁴⁾の身分が低かったが故に、継母である頼通の正妻隆姫女王⁵⁾に容れられず、橘氏に嫁すことになったという(図-1)。これらの説話集が伝える彼の出自に大差は認められないが、ただ『今鏡』¹⁾だけは、祇子が橘氏に嫁いだため俊綱も改姓したのだと伝え、俊綱自身が後に本姓に復したとまで記している。いづれも『今鏡』が説話集であるが故の事実の誤認であり、祇子が橘氏に嫁いだ形跡も、俊綱が本姓に戻った事実もない。彼は藤氏摂関家の血を濃く引きながらも、11世紀の全般を通じて諸国の受領として生きぬいた、やや二流の上流貴族であった。また、彼は土木工事全般を職掌とする修理大夫に長く在任し、『尊卑分脈』に「号伏見修理大夫、水石得風骨」⁶⁾と記すごとく作庭の分野に極めて造詣深く、一説には『作庭記』の著者とも目されている人物でもある。^{7),8)} 伏見に構えた彼の別邸「伏見亭」は、当時の新興貴族たちが集うサロンとして、和歌会を

中心とする一連の文化活動の舞台ともなっていた。そこにおいて繰り広げられた彼らの様々の歌の交歓は、『後拾遺和歌集』、『詞歌和歌集』⁹⁾などの勅撰和歌集にも撰じられ、内裏歌合などの朝廷の中心歌壇とは系譜を異にする、新進気鋭の「白河歌壇」を生む母胎ともなっていた。『今鏡』の中のいくつかの説話は、俊綱が自らの伏見亭をいかに自負していたかをつぶさに伝えているが、¹⁰⁾なかでも彼と白河上皇との間に交わされた次の会話は、彼の自信を端的に物語るものとして興味深い。

「白河の院。いちのをもしろき所はいづこかはある。ととはせたまひければ。一にはいしだこそ侍れ。次にはとおほせられければ。高陽院ぞさぶらふらんと申に。第三にはとばありなんやとおほせられければ。鳥羽殿は君のかくしなさせ給たればこそ侍れ。地形眺望などいとなき所なり。第三には俊綱がふしみなどやさぶらふらんとぞ申されける。こと人ならばいと申にくきことなりかし。高陽院にはあらで平等院と申人もあり。」(『今鏡』伏見の雪の朝)¹⁾

この会話には、俊綱の伏見亭に対する絶大なる自負とともに、修理大夫として作庭に精通する彼が、白河上皇の面前において披瀝した自らの別業論、庭園論とでもいうべき内容がこめられている。彼が当代有数の名園、居館、別業として三指に数え入れたのは石田殿、高陽院あるいは平等院、そして彼の伏見亭であり、選定の基準としたメルクマールは「眺望」・「地形」の2点であった。白河上皇の鳥羽殿は、この2点において他の3ないしは4庭園にはおおよばず、彼の選考から漏れている。しかし、鳥羽殿は、後述するように『扶桑略記』に「風流之美不

図-1 橘俊綱関連の系図

*奈良国立文化財研究所

可勝計」と記し、『栄花物語（紫野）』に「十町はかりは池にてはるばるとよもの海の景色にて」と記すごとく構想雄大な環境に立地し、俊綱推奨の庭園に優るとも劣らない構成、意匠であったことが想像される。俊綱の選考が果して客観的なものであったのかどうかについてもはなはだ疑問がある。したがって、まず彼が選考の指標とした2つの観点とはどのような意味を持ち、本当に鳥羽殿が他の庭園に比べて劣っているのかどうかについて検証してみる必要がある。

2. 研究の方法と目的

本研究では以上の点を考慮し、まず上記の会話中に登場した庭園の位置を文献によって探りあて、地理的な立地環境を明らかにする。各庭園の立地環境が明らかとなれば、それぞれの眺望対象物、つまり眺望景観の構成要素を明らかにすることができる。そして、視点と眺望対象物との水平、垂直方向の位置関係を指標として、各庭園における眺望景観の比較検討を行う。こうすることによって、俊綱が選考の指標とした「眺望」とはいったいどのような眺望形式を指し、「地形」とはいかなる地勢を意味するものであるのかが明確となる。また、俊綱の選考が果して客観的な妥当性を持つものであったのかどうかも自ずと明らかとなるものと考ええる。なお、俊綱が名園の選考を行った政治的背景、俊綱のおかれていた政治的位置、およびこの会話が持っている社会的な性格については、後日別稿において論ずることとする。

3. 会話の年代比定

第1節でふれた2人の会話が行なわれた年代は、いつ頃に比定できるであろうか。各居館の成立年代を示したものが表-1である。この表によると鳥羽殿のうち南殿の一郭が完成したのが応徳3(1086)年であるから、会話の年代がこれ以前に遡ることはあり得ない。高陽院は、後述するように、寛仁3(1019)年以降、11世紀の間に3回の火災を被り、そのうち最後の罹災は応徳年間の直前、承暦4(1080)年である。³⁹⁾ この後寛治3(1089)年に再建が開始され、新造後の高陽院は『後二條師通記』寛治6(1092)年7月21日条の記事に初めて登場する。また『中右記』によると、橘俊綱は寛治8(1094)年7月14日に67歳で没している。⁴¹⁾ したがって以上のことを勘案すると、上記の会話は寛治6(1092)年前後から寛治8(1094)までのほぼ2～3年間のいずれかの時点でかわされたものと考えられる。

一方、『今鏡』の同じ説話の中で、俊綱の実弟で時の関白職にあった藤原師実が伏見亭を訪問するくだりがあるが、この中で師実は「大殿」と称されている。⁴²⁾ 「大殿」とは、藤原忠平(貞信公)から道長の時代にかけて

は関白を引退してなお政治権力を持つ摂関家「氏の長者」などの呼称として用いられてきたが、師実以降、藤原忠実の頃になると、関白職にある者をも「大殿」と呼ぶようになる。⁴³⁾ したがって、師実の時代はちょうどその過渡期にあたり、どちらの用法であったかにわかに決し難い。もしこの時期に師実がすでに関白を引退して「大殿」と呼ばれていたとするなら、上記の会話の年代は、師実が関白を辞職して散位となった寛治8(1094)年3月8日⁴⁴⁾ から俊綱の死没する7月14日までの、期間に限定されることになる。しかも彼の死没を伝える『中右記』の記事には、死の直前約数十日は病状がかなり進行したとあるから、上皇と会話を交わすことのできた期間は一層短く、3月8日からわずか2ヶ月程度の期間にしばられる。しかし、『今鏡』の成立を12世紀半ばとする説⁴⁵⁾ が強いことからみて、説話集編纂時における「大殿」の語意がそのまま用いられたことも推定される。それ故本研究では、先述のように会話の年代にやや幅を持たせて、寛治6(1092)年から寛治8(1094)年の約2～3年間とみておきたい。

4. 各庭園の事例検討

① 石田殿

石田殿は、『今鏡』(伏見の雪の朝)⁴⁶⁾ の伝えるところによると、もともと藤原泰憲の居館であったが、藤原頼通の申し入れによって、その子の寛圓に献上された別業である。その位置については拙稿¹⁷⁾でも詳述したごとく、園城寺に北接し、琵琶湖に程近い傾斜地が最も可能性の高い比定地である。拙稿¹⁷⁾では触れ得なかったが、石田殿に関する記事を『帥記』⁴⁸⁾ 永保1(1081)年6月9日条にみることができる。

「辰刻人々云、山大衆興已焼三井寺、其煙焰天云々者、此間及已刻、驚参殿邊、……」

この記事は、いわゆる天台山門(延暦寺)と天台寺門(園城寺)との抗争の中で、後者が前者の攻撃を受けて炎上したことを示すものである。この両者派閥間の抗争は、中世を通じてきわめて長期間にわたって繰り広げられた同一宗派内の内紛であったが、もとをただせば天台宗開祖である最澄が入寂した直後にまで遡ることができる。すなわち最澄直系の弟子であった慈覚大師圓仁門徒と、最澄と共に入唐し最澄の後継者でもあった義真の弟子智證大師圓珍門徒との不和抗争が主たる原因であった。^{49), 20)} 両者は自然と離反して、前者は比叡山に残り、後者は下山を余儀なくされ園城寺を拠点とするようになったが、抗争は天台宗の最高職である天台座主就任をめぐる極めて熾烈化し、しばしば双方の伽藍の焼討ちという形で顕在化した。天台座主の就任問題は基本的に朝廷の議定に基づくものとされてはいたが、とりわけ寺門派から座主が選出された場合の山門派の抵抗は大きかった。

表－１ 各居館の造作年代年表

西 暦	年 号	天 皇	石 田 殿	高 陽 院	伏 見 亭	平 等 院	鳥 羽 殿
それ以前				賀陽親王邸宅(9C)		賀陽豊年「宇治之別業」 源融「宇治院」 源重信「山家」	
1000	長保 寛弘	一 条 (1011) 三 条 (1016)	この頃、藤原泰 憲から寛圓に譲 渡か？	寛仁3(1019) 藤原道長入手 ↑ 第Ⅰ期	治暦・延久年間 (1065～1073)成立 か？ ↑	道長別業「宇治殿」	
1010	長和 寛仁						
1020	治安 嘉祥 長元	後一条					
1030	長暦 長久	(1036) 後朱雀		長暦3(1039)焼失 ↑ 第Ⅱ期		永承7(1052)頼通、平等 院とする。	
1040	寛徳 永承	(1045)				天喜1(1053)阿弥陀堂成 立 天喜4(1056)法華堂	
1050	天喜 康平	後冷泉		天喜2(1054)焼失 ↑ 第Ⅲ期		康平4(1061)多宝塔 治暦2(1066)五大堂 延久5(1073)不動堂	
1060	治暦 延久	(1068) 後三条 (1072)					
1070	承保 承暦	白 河		承暦4(1068)焼失 ↑			
1080	永保 応徳 寛治	(1086)		寛治3(1089)年師実 再建開始 寛治6(1092)年師実 競馬を開催 ↑			
1090		堀 河 (白河)		寛治7(1093)焼失			応徳3(1086)南殿 ↑ 寛治2(1088)北殿 ↑ 寛治4(1090)馬場殿 寛治6(1092)泉殿 ↑
寛治8(1094)7月14日 橘 俊綱薨去							
1100	嘉保 永承 康和 嘉承	(1107) 鳥 羽		第Ⅳ期			

表－２ 高陽院の各時期の建物

時 期	年 代	寝 殿	小寝殿	東 対	西 対	北 対	釣 殿	泉 殿	馬場殿
第Ⅰ期	寛仁3(1019)～長暦3(1039)	○		○ (馬場殿)	○	○	○	○	○
第Ⅱ期	～天喜2(1054)	○	○	×	○		○		○
第Ⅲ期	～承暦4(1080)	内裏形式							
第Ⅳ期	～天永3(1112)	○	○ (東・西)	○	△ (西小 寝殿)	○		○	○

承保4(1077)年には、石田殿の主であった寛圓僧正の天台座主就任が決定したものの、山門の反対にあって比叡山に登ることができず、わずか3日間でその職を追われている。²¹⁾ 前記の『帥記』の伝える記事はその直後に当たり、最初は延暦寺鎮守社である日吉社の祭礼に端を発した小規模な対立であったが、やがて園城寺の全伽藍を焼失させるまでの一大抗争にまで発展した。まず寺門

(園城寺)方が山門(延暦寺)方に焼討ちを仕掛けたのだが、これに対抗してこの度は山門が寺門に焼討ちを仕掛けたものとみられる。

さて、この抗争問題はさておくとして、同記同日条には次のように記し、類焼を免れた石田殿の位置を類推することができる。

「……所遣下人罷帰云、山大衆罷入寺中云々、石田殿

図-2 石田殿推定地周辺地形模式図

北已焼了，至今者定皆悉焼候歟者，又令申云，後遣下人申云，三井寺人者於錦織邊雖合戦，先陣已敗罷入寺中，而寺兵十騎許於石田殿前欲相拒之間，山人自襲来東方放火，仍寺兵罷逃已了，寺中皆焼了者，……」

これによると，石田殿は園城寺の北，錦織までの区間に存在したことが推定される。これは，拙稿¹⁷⁾において『元徳二年日吉社并叡山行幸記』²²⁾や『梁塵秘抄』²³⁾などの記載事実をもとに，筆者が石田殿の比定地として挙げた地点と同一地点である。琵琶湖を望む東への傾斜地に立地し，俊綱の指摘どおり，眺望に優れた別業であったことがわかる（図-2, 3，写真-1）。

② 高陽院

高陽院は，9世紀前半，中御門南堀川東に南北2町にわたって存在した賀陽親王の邸宅を，11世紀初頭に東に隣接する2町を含めた計4町を藤原頼通が入手し，²⁴⁾整備拡充したのが最初である。頼通は，自らの邸宅として，高陽院の造作にかなり手を入れたらしく，『御堂関白記』²⁵⁾寛仁3(1019)年2月2日条に「摂政初大炊御門（高陽院）造作」とあるごとく，陣頭にたって工事を指揮したらしい。高陽院に関する事項は既に諸先学に詳しい。^{26), 27), 28)}それらが明らかにするところの，各時期に存在した主要殿舎をまとめると表-2のごとくなる。これをもとに，従来明らかにされている院の変転を，庭園を中心としてまとめてみると以下ようになる。

(1) 第1期高陽院

第1期は，頼通が宅地を入手して造作を開始した寛仁3(1019)年頃²⁵⁾から，最初の火災，すなわち比叡山の焼討ちにあって焼失する長暦3(1039)年3月16日²⁹⁾までである。この時期の高陽院の状況をつぶさに記すのが，萬壽1(1024)年9月高陽院において行われた競馬に関する

写真-1 石田殿推定地からの現状眺望景観（東方）

『栄花物語』³⁰⁾の有名な「こまくらべの行幸」の描写であろう。

「高陽院殿有様，この世のことゝ見えず。海龍王の家などこそ，四季は四方に見ゆれ。この殿はそれに劣らぬ様なり。例の人の家造などにも違ひたり。寝殿の北・南・西・東などには皆池あり。中島に釣殿たてさせ給へり。東の對をやがて馬場のおとゞにせさせ給て，その前に北南さまに，馬場せさせ給へり。目も遥におもしろくめでたき事心も及ばず，まねび盡すべくもあらず。おかしうおもしろしなどは，これをいふべきなりけりと見ゆ。繪などよりは，これは見所ありおもしろし。……こゝに百敷の東いくばくも去らざる程に，古より勝れたる所に，新しき花の甕を造り續け，玉の臺を磨きなして，あやしき草木を掘り植へ，かどある巖石を立て並べて，山を疊み，池を湛へしめ給へるを御覽ぜさせむとて，……御門など例の門にはあらず，樓を造らせ給へるかし。……」

海龍王経に記す海龍王の家になぞらえつつ，寝殿の四

図-3 5 庭園の視点と眺望対象物の位置関係

周を池がとり囲んでいることや、中島に釣殿を配している点、また東門が楼門であることなど、高陽院の建物、庭園のデザインが普通の寝殿造とは極めて異質のものであったことが描写されている。引用文の中段以降の「こまくらべの行幸」の後宴に関する記述からは、高陽院の

変化に富んだ地形をうかがい知ることができる。

同様の記事は、第1期高陽院が完成した直後の姿を伝える『小右記』³¹⁾の記述にも見ることができる。

「参高陽院、上達部多會、營造之由、作山立石公(云々カ)、高大莊麗無可比類、……令成五六尺立石、令植樹木云々、……」

これは、治安1(1021)年9月29日に、息男資平の高陽院訪問に関する報告を受けて、藤原実資が自らの日記『小右記』³¹⁾にしたためた一文であるが、庭園には「高大莊麗無可比類」であるほどの築山と立石が築かれ、とりわけ後者は高さ5〜6尺にもおよんだという。

さらに、長元8(1035)年5月16日に行われた歌合の内容について記した『賀陽院水閣歌合』³²⁾には、次のように記し、その絢爛さがわかる。

「……三位中將當日追爲左方念人。文殿并水閣南廊爲

左右宿所。當日早旦。東廂水閣。……先文殿南約臺下無船二隻。……方念人宰相中將。……渡寢殿東階歷東對北階來臨。鼓棹盪舟。自後池北歷寢殿東高階下潺湲參進。……池水湛然。遂不知方外也。人間也。亦不知崑岡歟。蓬瀛歟。縱觀之者目不暫捨矣。或衣色照耀於簾中。或香氣

酷烈於檻外。斯乃優悠好耳目之娛也。棹影穿波着南洲。階下異草雜種。奇巖佐石。千名万形。……」

文殿南の釣臺から2隻の舟で出発した歌合の左方人たちは、寝殿北側の池から寝殿東方の遣水を下って南の池へ入り、中島南側の反橋辺りで下船して、徒歩で水閣まで至っている。先の『栄花物語』³⁰⁾の記述のごとく、寝殿の四周を園池がとりまいていたことがここにも描かれており、船の往来が可能なほど大規模であったことがわかる。植栽樹種も「異草雜種」と記すほど豊富であり、そこここに配置された石組も「奇巖佐石。千名万形」とあって極めて優れていた。

このように地形の変化に富んでいたことは、長元4(1031)～5(1032)年に上東門院彰子の高陽院移徙にともなって、高陽院において行われた朝覲行幸の儀を伝える『左経記』³¹⁾長元5(1032)年正月3日条の次のような記述にも現われている。

「……午時乗輿、経日華建春陽明等門、自大宮南行、自大炊御門東行、入自高陽院南門、経東山路、於東對前下御輿、御休所……」

見られるように、後一条天皇の高陽院行幸のコースは、御輿が高陽院南門から邸内に入り、「東山路」を経て東對前面まで到着している。すなわち高陽院南門から東對に至る区間は築山の間をぬって「山路」となっていたことがわかる。これより以前、同記の萬壽2(1025)年正月20日条の高陽院に関するものと思われる記述には「南山路」の文字が見え、南池の南側には池を掘りあげた残土を高く積んで築山が構築されていたことが想像される。

「晴、午剋許參閔白殿、以寝殿西放出四間戸西對西廂等客亭、諸卿上官參會、……出御既經南山路、列西中門、渡南庭、鷹飼取雉到立作所付雉、賜盃祿如常、了經東池上階去了、……」

また、『栄花物語』³⁰⁾(巻34歌合)によると、第1期高陽院の渡殿の下には龍が存在したことがわかる。

「院(上東門院)の高陽院殿に渡らせ給ておはします。殿の上に御對面などあり。殿へ御前は、いかならんけうらを盡しても御覽ぜさせむとおぼしめしたり。泉の上の渡殿に、四條中納言参り給へるに、出羽の弁對面したるに、殿、内より御火取持ちておはしまして、空薫物せさせ給て、添ひおはします。なかなかいとつゝましく、物聞え給も、うち出でにくゝ覚えけり。繪に書きたる心地す。その頃、伊豫の中納言の君、龍の音をきゝて、

わきかへり岩間をわくる龍の絲の

亂れて落つる音高きかな 出羽の弁

とくれども沫にもあらぬ龍の絲を

常に縫りても見まほしきかな

などはかなき事をいひつゝ、明し暮すもおかしくなんありける。」

寝殿と東對とを結ぶ東渡殿は床の高い構造を持ち、下

を船の往来が可能であったから、東渡殿の下に滝が存在したとは考えられない。上記の引用文の渡殿は寝殿と西對を連結する西渡殿で、この直下に龍が存在したものと考えられる。しかし西對と寝殿との間、あるいは寝殿、西對を境として北と南で大きな瀧を生成するほど地形の高低差があるとは考えられないから、この龍はそれほど落差のある瀧ではなく、西池と南池との間に岩が組まれ幾分せせらぎが生じた程度のものであっただろう。

いづれにしても、第1期の高陽院の庭園は、築山、立石、水面、流れなど、極めて地形の変化に富んでいたことが指摘できる。

(2) 第2期高陽院

第2期の高陽院の存続期間は、長暦3(1039)年の罹災の直後に再び造作が開始され、³⁴⁾次の火災で焼失する天喜2(1054)年正月8日³⁵⁾までの約10数年間である。この時期の庭園の状況を伝えるのが、『栄花物語』³⁰⁾(巻34暮まつほし)の次のくだりである。

「かくて十二月の一日、又一条院焼けぬ。……内は高陽院に渡らせ給ぬ。…高陽院殿に一の宮、殿の上もおはします。…一の宮は女院のおはします寝殿の東面、そなたの廊かけておはします。東の對はこの度はなくて、山河流れ、龍の水競ひ落ちたる程など、いみじうおかし。」

この記事は、長久3(1042)年に内裏、一条院里内裏が次々火災にみまわれたため、その翌年の長久4(1043)年の末に後朱雀天皇が一時高陽院を里内裏としたときの記述である。ここにおいても、築山を縫って流れる遣水があり、その途中に龍が存在したことがわかる。おそらくこの龍は第1期の龍と同一のものであろう。この龍を見て詠んだ後朱雀天皇の和歌が『新古今和歌集』³⁶⁾に撰じられている。

「上東門院、高陽院におはしましけるに、行幸侍りてせきいれたるを御覽じて

たきつせに人のこゝろをみることは

昔に今も變らざりけり」

これに対してかなりの落差のある龍が存在したことを思わせるのは、天喜1(1053)年8月20日、後冷泉天皇の里内裏として使用された際の『栄花物語』³⁰⁾(巻36根あはせ)の次の記述である。

「高陽院殿へ有様、いとおもしろくをかし。西對を例の清涼殿にて、寝殿を南殿などにて、小寝殿とて又いとをかしくてさし並び、山はまことの奥山と見え、瀧木暗き中より落ち、池の面遙に澄み渡り、左右の釣殿などなべてならずおかし。秋深くなるまゝに、紅葉の薄き濃きも錦を引けるやうなり。」

内裏として使用するために既存の西對、寝殿をそれぞれ清涼殿、南殿に充てるほか、小寝殿を増築し、対面する築山には鬱蒼と生い茂る樹間から龍が落とされていた。この龍は先述の西對と寝殿との間に存在したと思われる

であるのか、明確には決し難い。前者である可能性も大きいのだが、また後者を否定することもできない。もし後者であるとするなら、どちらの方角に対する眺望景観であったらうか。先ず寝殿が南面し、馬場殿が東面しているから、北方向の眺望ではなかったであろう。寛治7(1093)年2月22日の時点では西對(西小寝殿)など、寝殿西方の殿舎群の建設が未だ手つかずのままで、⁴⁷⁾ 寝殿、東對、馬場殿など敷地の中央から東半部にのみ建物が建設されていたことが推定される。したがって、高陽院の邸宅内から邸宅外の風景を眺望できるとすれば、邸宅内の建物が比較的希薄だと推定される西方向の眺望であったのかもしれない。しかしながら高陽院は平安宮東方の平安宮にほど近いところに位置しているため、高陽院西方の眺望は平安宮の殿舎群が視線を阻害して不可能に近いものと推定される。これに対して東方は比叡山をはじめとする東山連峰が西方の愛宕山などの西山連峰に比して至近距離に存在するため視線の仰角が大で、馬場殿や東對東面からは眺望が比較的容易となる(図-3、4)。寝殿南面からも邸宅内の東半部に存在する建物がどの程度視界をさえぎるのか不明だが、あるいは屋根と屋根の間から東山を垣間見ることも可能であったかも知れない。

同様の記述は、『後二條師通記』寛治6(1092)年9月6日条にも見ることができる。

「晴、参高陽院、入自北門、諸大夫等下劣人満居庭中南北、面白眺望無極、……」

これは師通が、通用門である北門から高陽院に入った後、どこに到着したのかは不明だが、おそらく寝殿南面から南庭に列する諸大夫等に対面したときの記述で、その状況を「面白」く「眺望」していることがうかがえる。この「眺望」も果して邸宅外の景観をも含めたものであるかどうかは疑わしいが、注意を要する記事ではある。

この後、橋俊綱が亡くなった直後の承德1(1097)年8月には、台風によって完成間もない西對が倒壊するなどの大きな被害を受け、⁴⁸⁾ 西對の再建に際しては里内裏とするためか白河法皇の命によって計画変更を行い、西對が小寝殿に改められた。⁴⁹⁾ 新造なった里内裏高陽院の状況は、『中右記』⁵⁰⁾ 承德1(1097)年10月17日条が次のように伝える。

「今日依吉日与四位少將同車参内、見新造御所高陽院体、寝殿之西又新立小寝殿為中殿、其儀如清凉殿、……凡勝地幽奇、風流勝絶、池水湛千秋之色、山形伝万歳之声、是非啻葉之槐門、兼又伝四代之皇居也、」

第1～3期に劣らず、第4期の庭園も秀逸を極めたことがわかる。とりわけ築山は「伝万歳之声」ほどの立派なつくりで、地形の妙はこの時期においても優れていた。第4期には新たな遣水の造成や改修があるものの、以前の水脈が変化したことや第3期の地形を大きく改変し

写真-2 発掘調査で検出された高陽院の園池
(調査：京都市埋蔵文化財研究所 1981)

たと思われる記録はないから、おそらく第3期の2つの龍もそのまま存続したのであろう。

以上のように、11世紀の高陽院はいづれの改作においても地形の変化に富んでおり、橋俊綱の推奨する庭園としてふさわしいものであったといえる。

③ 伏見亭

伏見亭の概要については、既に拙稿⁵¹⁾で明らかにした。ここでは、上記の拙稿において触れなかった史料をもとに、伏見亭の位置について記す。

伏見の大亀谷笹谷町は正圓寺に伝わるとされる『伏見山寺宮近廻地圖大概』⁵²⁾なる1枚の絵図が存在する(図-5)。この絵図は、南は巨椋神社から北は稲荷社まで、東は醍醐の山並から宇治平等院、西は深草宮までの範囲を描いており、奥書には次のようにあって文安2(1445)年4月に北尾村郷士である石川清重なる人物が光厳院の

図-5 伏見山寺宮近廻地圖大概(部分)⁵²⁾

塔頭から拝借して書写したものだという。

「伏見山柏原神明社旧別當 大亀谷笹谷町正圓寺所蔵古圖寫

此伏見山近廻之名□地圖者光嚴院之塔頭大□院良元
禪師之所蔵也則拝借

而令寫云

文安二年乙丑四月中旬

北尾村郷士 石川清重（花押）」

この写本は、その後天正2(1574)年戊月に浄安寺に写本が伝わり、さらに浄安寺のものを写して正圓寺所蔵としたのが正徳3(1713)年であった。その後明治43(1910)年、大正6(1917)年11月1日、大正14(1925)年2月16日に、それぞれ写して修繕したものが最終的に伏見町役場に伝わったものと思われる。絵図の変転が著しいため、描かれている内容の年代特定や真偽の程は疑わしいが、15世紀以前の伏見周辺の状況がある程度推定することのできる貴重な史料ではある。

この絵図の中に俊綱の伏見亭が記されており、宇治川、巨椋池の北岸、指月の森の東北方、即成院村の東方に位置することがわかる。即成院村はおそらく俊綱の菩提寺即成院に由来する集落名と思われ、『雍州府志』(五)⁵³⁾には次のように記す。

「即成院 在伏見始號光明山……始修理太夫橋俊綱山莊在伏見城山之南豊後橋邊、其地向南山水在目前、且其地形自有高低雪朝特添奇観、俊綱常以是誇人死後山莊為寺號即成院、……」

いまこれらの位置を現状の地形図で追ってみると、俊綱の伏見亭は宇治川に南面する伏見山の南麓に存在したものと推定できる。『雍州府志』⁵³⁾の「豊後橋」は現在の観月橋に当たり、これより東方の宇治川右岸は比高約15mの崖地形になっており、鬱蒼とした樹林に覆われている。このあたりは先の絵図によると「指月の森」のあたりである。『雍州府志』(一)⁵³⁾には「指月 在豊後橋東城山上」と記し、『山州名跡志』⁵⁴⁾ 卷13には次のように記す。

「指月 地名 云橋北至東二町餘内、此地景色アリ。東南西ニ渺々タル流アリ。巽ニ巨椋入江。東ニ伏見澤アリ。爾バ便愛月ニ無雙ノ景色也。故ニ此名ヲナス地ニ在月橋院。此院ノ後丘ノ上。北方二町許ニ通東西街アリ。是ヲ號立賣秀吉公在城時所開也。指月ハ此街南東西三町許惣名也。」

この樹林帯の東側には南北に走る小谷地形が存在し、俊綱の伏見亭はこの谷地形東方の丘陵上に比定することができる(図-6)。この地点からは、眼下に宇治の川浪と、絵図に記された「宇治の湿田」、およびその先には広大な巨椋池の水面をはるかに望むことが可能である。また水面のさらに南は、山城盆地を経て奈良山、生駒山系をも眺望することができる(図-3、写真-3)。こ

図-6 伏見亭推定位置図

写真-3 伏見亭推定地からの現状眺望景観(東南方向)

の伏見亭比定地における「地形」の高低差と、そこから180度に展開する「眺望」とは、とりもなおさず伏見亭を推賞した俊綱の自負心の裏付けとなるであろう。

④ 平等院

平等院は、長徳、長保年間(995~1003)以来藤原道長の別業であった「宇治殿」が、道長没後の永承7(1052)年、頼通によって仏寺となったことに端を発する。

⁵⁵⁾ 寺院内には、多くの堂舎の存在したことが判明するが、それらは永承7(1052)年の時点ですべて存在したわけではなく、ある時間を経て順次増築されて行ったもの

である。本堂は永承7(1052)年に造営されるが、⁵⁶⁾「鳳凰堂」の別称で知られる阿弥陀堂は天喜1(1053)年3月、⁵⁷⁾法華堂は天喜4(1056)年10月、⁵⁸⁾多宝塔は康平4(1061)年10月、⁵⁹⁾五大堂は治暦2(1066)年10月、⁶⁰⁾そして不動堂は延久5(1073)年⁶¹⁾に、それぞれ付加建造されていった。これらの諸堂舎の位置については既に詳しい研究^{62),63)}があり、これを推定図示したものが図-7である。宇治川の左岸に位置し、宇治川の旧河床とでもいうべき池と、これに東面する阿弥陀堂を中心とする寺域である。平等院の寺域内と、寺をとりまく地形環境を具体的に示す史料は、『扶桑略記』や『為房卿記』、あるいは『後二條師通記』などの中に散見される。

『扶桑略記』治暦3(1067)年10月5日条の記事は以下のごとくである。

「天皇車駕幸臨宇治平等院、宸儀渡御兎道橋之間、伶人棹華船、沂河上、凡仁祠之莊嚴、事絶于囊篇、入御之後、即駕腰輿、奉礼阿弥陀堂、池上架錦繡仮屋、又池中有龍頭鎬首船、奉堂楽訖、渡御経蔵、御覧仏具、還御之後供御膳、以金銀珠玉儲之事之希有、殊催歎感、翌日雨下、乘輿停蹕、風流地勢殊可賞翫」

この記事は、後冷泉天皇が平等院に御幸した時の記事であるが、見られるように宇治川から船で平等院内に入った後、御輿によって阿弥陀堂前面の池上に設営された仮屋に至り、そこから阿弥陀堂の奉礼を行ったことがわかる。池には龍頭鎬首の船が浮かべられ、「風流地勢殊可賞翫」と記すごとく、人為的な演出効果と自然の地形とが織りなす妙は賞翫に値すべきものであったらしい。

同じ行幸に関する記事は、『今鏡』(すべらぎの上 金のみり)にも見られる。ただし『今鏡』では、天皇の

行幸を治暦3(1067)年10月15日のことと記す。

「三年十月十五日には宇治の平等院にみゆきありて。おほきをとゞ(頼通)二三年かれにのみをはしましゝかば。わざとみゆき侍て。見たてまつらせ給とぞうけ給りし。うちはしのはるかなるに。船よりがく人まいりむかひて。宇治川に船うかべてこぎのぼり侍けるほど。からくにもかくやとぞ見えけると人はかたり侍りし。みだうのありさま。かはのうえに錦のかりやつくりて。いけのうえにも。からふねにふゑのねさまましらべて。御まへの物などは。金銀いろいろのたまどもをなんつらぬきかざられたりける。」

治暦年間には頼通は宇治へひき籠りがちで、これを見舞った後冷泉天皇は、宇治川沿いに船で平等院に到着したことが想像され、これを楽人等の船が歓待したという。宇治川には仮屋が架けてあり、ここから阿弥陀堂に対面したことがわかる。すなわち宇治川左岸では、川の水面上から直接阿弥陀堂を望むことが可能であったことが想像され、現在の堤防はさらに低かったものと考えられる。⁶⁴⁾

また、『為房卿記』⁶⁵⁾寛治1(1087)年5月16日条には、宇治に到着して一旦泉殿に入り、御堂すなわち阿弥陀堂から寺域の北側に存在した富家殿へと至るコースをとっている。

「参宇治。殿下御泉殿。次令渡御堂給。被開経蔵。……次巡礼諸堂。次自御船渡御富家殿。臨昏御帰洛。」

この記事は、寺域内の宇治川岸から直接乗船して北上したことを想像させるから、前記の『今鏡』の記述と同様に、現在宇治川左岸に存在する高い堤防が当時はさほど比高のなかったことを思わせる。この時期には既に頼通は亡く、宇治はもっぱら頼通の男師実とその一男師通が利用していたが、師通の日記『後二條師通記』⁶⁶⁾寛治7(1093)年2月2日条には、次のような興味深い記述が認められる。

「平等院眺望無極。寺中神妙……」

この一文からは、寺域の神妙さに加えて、眺望に極めて優れていたことがわかる。もっとも、この眺望がいづれの方向に対する眺望であるのかは判然としませんが、阿弥陀堂から宇治川を越えて対岸の朝日山(仏徳山)などの山脈に対する眺望、と理解するのが自然であろう。とすれば、前記の『為房卿記』の記述からうかがい知れるように、宇治川左岸の堤防は現在よりもかなり低く、寺域から朝日山に対する眺望は今以上に広々としたものであったに違いない(写真-4,5)。

また、寺域内の変化に富んだ地形がわかる史料として、やや時代が下がるが、『中右記』長承1(1132)年9月24日条⁶⁷⁾や『兵範記』仁平3(1153)3月3日条⁶⁸⁾の記事を挙げることができる。

「今日院有御幸宇治平等院、……巳時白河御所出御、經大炊御門東洞院六條萬里小路九条、……関白冠直衣御

図-7 平等院推定加藍配置図²⁷⁾

写真-4 平等院阿弥陀堂前からの現状眺望景観（東方）

写真-5 平等院東の宇治河畔からの現状眺望景観（東南方）

車、……入御北大（門）内、寄御車於本堂廊北階、佛前中央間東庇敷高麗一枚供茵、為御座、御覽本堂并懺法堂東階、經池辺、寄御車於阿弥陀堂西廊御覽、兼儲御座如初、經本路寄御車於小御所南御覽、次經野路御覽花園、乍御車覽之、次舞臺北、寄御車於経蔵、前門敷庭道、……数刻御覽、寄御車於棧敷、廊為御所、……」（『中右記』長承1（1132）年9月24日条）

「天晴、鶏鳴入道殿還御宇治、直着御平等院、依一切経会也、下官依催追参上、禪定自今朝御坐本堂御所也、……午刻、移御棧敷、透御輦、……其道添池辺、經阿弥陀堂北廊北、自山路經圓堂南五大堂後、依不可経堂前、不令直行給也、……」（『兵範記』仁平3（1153）3月3日条）

これらの記述によると、長承年間から仁平年間にかけては、東小御所の南側、経蔵に至る区間は花園の間を縫って「野路」になっていたことや、阿弥陀堂の西側から南側にかけては「山路」になっていたこと、等が判明する。本堂は永承7（1052）年、五大堂は治暦2（1066）年の建造になるから、これ以後仁平年間までの間に寺域内の大規模な地形の改変があったとは考えにくい。それ故「野路」「山路」は、俊綱と白河上皇との間に問題の会話が交わ

された寛治年間の後半期（1092～1094）においても、既に存在していたものと考えて大過あるまい。江戸時代の『都名所図会』⁶⁹⁾には、阿弥陀堂の西側にかなり比高のある石積擁壁が描かれており、『兵範記』に示す「山路」の名残であろうと思われる（図-8）。この地形の高低差は、現在でも認めることができる。この山地形の頂部からは、阿弥陀堂前面における眺望よりも、さらにひろびろとした宇治川ならびに対岸の朝日山（仏徳山）の眺望が得られたことと思われる。また、西方浄土をこの世に具現する阿弥陀堂の背景的效果を持つ装置として、上記の山地形が予め準備されていたと理解することも可能である。

以上のように平等院では、阿弥陀堂前面から宇治川を越えて対岸の朝日山を広々と眺望することが行われると同時に（図-3）、池をはさんで阿弥陀堂の対岸から山地形を背景に西方浄土を眼近に眺望するという、互いに正反対の方向に作用する2つの視線が想定されるのである。俊綱が指摘した「地形」「眺望」とは、平等院庭園において見る限り、上記の2方向の眺望を指すとともに、眺望を確保し、眺望の効果を高める庭園内の地形の高低差をも含むものであるといえる。

⑤ 鳥羽殿

冒頭に述べた会話が交わされたのは、鳥羽殿が建設されて間もない頃であった。応徳3（1086）年に、まず南殿が造営された。その後寛治2（1088）年に北殿、⁷⁰⁾ 寛治4（1090）年に馬場殿、⁷¹⁾ 寛治6（1092）年に泉殿⁷²⁾などの殿舎が次々と建設されて、多くの離宮、御堂が建ち並んで行った。その造営当初の記事は『扶桑略記』応徳3（1086）年10月20日条に見ることができる。

「公家近来九條以南鳥羽山莊新建後院。凡ト百餘町焉。近習卿相侍臣地下雑人等。各賜家地。営造舎屋。宛如都遷。……堀池築山。自去七月。至于今月。其功未了。……池廣南北八町。東西六町。水深八尺有餘。殆近九重之淵。

図-8 江戸時代の平等院（『都名所図会』⁶⁹⁾）

或摸於蒼海作島。或寫於蓬山疊巖。泛舩飛帆。煙浪渺々。飄棹下碇。池水湛々。風流之美不可勝計。」

南北八町、東西六町という広大な池沼は、鴨川、淀川によって形成された氾濫原と遊水池であり、これを庭園としてとりこむ、まさに自然の景勝地の中に一体的に造営された離宮であった。『栄花物語』（巻第四十紫野）³⁰⁾は、造営当初の姿を「九條のあなたに、鳥羽といふ所に、池、山廣うおもしろう造らせ給は、……」と伝える。『中右記』、⁷³⁾『後二條師通記』⁷⁴⁾は、ともに寛治2(1088)年3月9～10日に石清水行幸の後鳥羽行幸があったことを記し、この時の模様を同じ『栄花物語』（巻第四十紫野）³⁰⁾は「八幡行幸つごもり方にありて、歸さにかの鳥羽院におはしまさせ給。十餘丁を籠めて造らせ給。十丁ばかりは池にて、遥ばると四方の海のけしきにて、御船浮べなどしたる、いとめでたし。……」と伝える。全面積「十餘丁」のうち「十丁ばかり」が池であったというから、ほぼ7割が自然の水面で占められ、四方はさながら海のような水面景観を呈していたことがわかる。しかし、いづれの文献にも、優れた眺望に関する記述は認められない。

ところで鳥羽殿の発掘調査は1962年から継続的に行われ、上記の殿舎配置や池の範囲、および建物の特殊な基礎構造、庭園的なデザイン、構築技法に関する新しい知見が得られつつある。⁷⁵⁾ 図-9は明らかとなった遺構の平面を模式的に示したもののだが、鳥羽作道の東側に広が

る鴨川に面して西南岸に南殿、西北岸に北殿、中島に馬場殿、東北岸に東殿（泉殿）と、大きく4つのブロックに分けて建物群が配置されていたことが推定される。池の汀線は、いずこも礫を敷きつめた州浜に大きな景石を配置しているから、自然の川岸を利用しながらも建物に面する部分のみ庭園的な意匠を施したものとみられる（写真-6）。これらの建物群のうち、北殿、泉殿は建物遺構を検出していないので不明であるが、南殿に関しては寝殿、小寝殿、証金剛院御堂と、これらを連結する廊を検出している⁷⁶⁾。寛治年間後半期（1092～1094）の南殿には証金剛院は未だ建造されていなかったから、かかる年代の建物は寝殿と小寝殿ということになる。前者は5×2間の母屋の四面に庇、東面と北面に孫庇が付く立派な東西棟で、後者はそれよりもやや小さい3×2間の母屋の四面に庇、東面に孫庇が付く東西棟である。（図-10,11）いづれの建物も南面および東面しており、この2つの建物からは東南方向に水面を越えて遙かな眺望が可能であったはずである。しかし、南殿は鴨川の水面に接しており、かなりの低所に位置している。また、図-3からもわかるように、南の方向には眺望すべき山脈が適当な位置に存在せず、東の方向に位置する伏見山（大岩山）もそれほど標高のない丘陵である。したがって南殿からの眺望は、近景の水面と遠景の山脈とを、互いに平面と立面というコントラストのある景観として広々と見渡すような「眺望」ではなかったことがわかる（写

図-9 発掘調査で明らかとなった鳥羽殿の園池と建物
文献⁷⁵⁾所収の図より作図

写真-6 鳥羽殿庭園遺構
(調査；京都市埋蔵文化財研究所 1984)

真-7)。

以上のように、鳥羽殿は自然の沼沢地を利用した構想雄大な庭園を具有していたにもかかわらず、眺望の視点となる建物の位置が低いうえに、眺望の対象もさほど標高の高い山脈ではないため、眺望景観はやや平面的なものにならざるを得なかったものと思われる。そこに、俊綱があえて退けた根拠を見いだすことができるであろう。

5. 各庭園の比較検討

前節で明らかにした各庭園の比定地をもとに、各事例における視点と眺望対象物との位置関係をまとめたものが図-3と表-3である。この図および表によれば、5者のうち高陽院以外のいずれの庭園も、自然に形成された水面と、その後方に存在する山並とを主たる眺望対象としていることが共通点として指摘できる。以下にこの表をもとに、5庭園の比較検討を試みる。

まず、水面の大きさ、および視点と自然水面との位置関係を指標として検討しよう。

石田殿、伏見亭、鳥羽殿は、いずれも広大な自然の水面に臨むという点で共通している。石田殿は琵琶湖の南湖、伏見亭は巨椋池遊水池、鳥羽殿は鴨川遊水池がそれぞれ眺望対象となっている。面積別にみると、石田殿、伏見亭、鳥羽殿の順に大きい。しかし、視点と水面との位置関係を考慮すると、石田殿、伏見亭の場合は水面と建物との間に一定程度の距離と高低差のあることが想定されるのに対し、鳥羽殿は視点のすぐ前面が自然水面を取り込んだ園池となっており、視点と水面との距離や高低差はきわめて小さい。すなわち、石田殿や伏見亭が広大な自然水面を高所から俯瞰するため、水面をより広く立体的に眺望することができるのに対し、鳥羽殿は視点が低いために水面景観が平面的になりがちであることがわかる。これに対し平等院は、宇治川という自然の水面に面するという点で石田殿、伏見亭、鳥羽殿と共通しているが、宇治川の水面は鳥羽殿の鴨川遊水池よりもさらに小規模である。また、高陽院の水面は人工的に造

図-10 鳥羽殿南殿遺構模式図
文献⁷⁸⁾所収の図より作図

図-11 鳥羽殿南殿推定復原鳥瞰図⁷⁸⁾

成された園池で、自然の営力によって形成された水面ではない。4町四方(約240m四方)の敷地を持つから、水面の規模も自ずとこれを越えるものではあり得ない。

すなわち、水面の大きさや水面と視点との位置関係から判断すれば、石田殿、伏見亭における景観構成は格段の雄大さを誇るが、鳥羽殿は視点と眺望対象物との位置

写真-7 鳥羽殿からの現状眺望景観(東方)

表-3 各庭園の視点・眺望対象・眺望角度

 $(\theta = \tan^{-1} ((H_1 - H_2) / L))$ ○印は自然水面

庭園名	推定地の 現状高(m) H_2	眺望 対象物	眺望対象物 の標高(m) H_1	眺望対象物 の方向角	対象物まで の距離(m) L	視 角 θ	視角の最大と 最小の差
石田殿	120	三上岳 御在所 秋迦岳 琵琶湖東岸 琵琶湖西岸 ○ ○	432 1,210 1,092 85 85	78° 90° 92°	16,700 51,500 54,000 5,500 700	+ 1° 04' + 1° 12' + 1° 02' - 0° 22' - 2° 52'	± 4° 04'
高陽院	45	大文字山 花比叡山 比叡山	466 221 848	90° 130° 50° ~ 60°	6,000 4,500 9,600	+ 4° 01' + 2° 14' + 4° 47'	± 4° 47'
伏見亭	30	鷺峰山 生駒山 巨椋池南岸 宇治川北岸 ○ ○	681 642 15 15	130° 195° 170° ~ 240° 140° ~ 240°	17,000 29,500 4,500 200	+ 2° 11' + 1° 11' - 0° 11' - 4° 17'	± 6° 28'
平等院	16	仏徳山 宇治川右岸 宇治川左岸 ○ ○	132 15 15	53°	680 120 70	+ 9° 38' - 0° 43' - 1° 14'	± 10° 52'
鳥羽殿	13	大岩山 醍醐山 鴨川左岸 鴨川右岸 ○ ○	184 450 12 12	88° 96°	4,300 8,500 800 ~ 1,000 65	+ 2° 16' + 2° 57' - 0° 04' - 0° 52'	± 3° 49'

関係において、平等院、高陽院は水面規模の点でやや劣っているといえる。

次に、視点と山並との位置関係について比較しよう。

石田殿、伏見亭では、小高い丘陵上を視点として、至近距離にある広大な琵琶湖や巨椋池遊水池の水面から、かなりの遠距離に存在する御在所岳、生駒山、鷺峰山などの山並に至るまで、広く俯瞰することができる。これに対して鳥羽殿では、鴨川・淀川の氾濫原に位置するが故に標高も低く、周辺に優れた眺望を確保するような丘陵地形は存在しない。東方に伏見丘陵や醍醐の山並を望むことも可能ではあるが、伏見丘陵の最高地点、大岩山はさして標高が高いわけではなく(184m)、醍醐山も標高の割に鳥羽からの距離が長いこと、鳥羽殿の位置が低地で視点が低いことなどから、望まれる山のスカイラインはそれほどコントラストの明瞭なものとはならない。また平等院では、宇治川という自然の水面を介して東方の朝日山(仏徳山)を眺望するという点で石田殿、伏見亭と共通し、しかも視点から朝日山までの距離が短いために仰角は大きく、山のシルエットはかなり明瞭なものとなっている。これに対し高陽院では、『後二条師通記』の記述からもうかがい知れるように、東面する馬場殿や東對などからは比較的東山の眺望が可能であったことが想定されるものの、それ以外の寝殿や庭園内の一画からは部分的な眺望にとどまったであろう。

このように、石田殿、伏見亭、平等院から望まれる山岳景観に比較して、鳥羽殿や高陽院におけるそれはややランクの低いものとして位置づけることができる。

上記の水面と山並とで構成される景観の総和を、視点における視界の広がりやを考慮してとらえた場合、次のような点が指摘できる。

まず水平方向の視界の広がりでは、石田殿、伏見亭、平等院、鳥羽殿の四者がほぼ180°の視界の広がりを持つことが想定される。石田殿、伏見亭は高所に位置するため、余ほどのことがない限り常に広範囲に渡る眺望が確保されていたものと推定できる。平等院も宇治川左岸の堤防が現在よりもっと低く、庭園と宇治河畔とが連続するような河岸景観であったとするなら、180°の眺望が可能であっただろう。鳥羽殿南殿の眺望においても、図-9から判断すれば同様のことが推定できる。これに対し、唯一高陽院が同一敷地内の建物や東方の市街地に阻害されて部分的な眺望にとどまることが想像される。

また垂直方向の視界の広がりやを、眺望対象物に対する視線の傾きとしてとらえれば、いづれの事例も±3° ~ ±10°の範囲に納まるが、なかでも鳥羽殿が一番低い値を示すことがわかる(表-3)。つまりこの数値は、鳥羽殿の眺望景観が最も平面的であることを端的に示している。

以上の比較検討の結果から、石田殿、伏見亭は、景観構成要素およびそれらの位置関係の点できわめて優れており、これに次ぐものとして平等院を挙げることができる。部分的な眺望の可能性をはらむ高陽院や、眺望景観がやや平面的であった鳥羽殿は、上記の3例にはややおよびないものだといえよう。その点では『今鏡』に伝えるように、俊綱が第2に選定したのは高陽院ではなく平等院であった可能性が高い。しかし、高陽院がデザイン・構想ともに優れた当代有数の第宅であったことは当時の世人たちの衆目の一致するところであり、また、『扶桑略記』の記載が示すように、鳥羽殿は、園池が大海を思わせるがごとく広大で深く、四方に四季の景色を望むがごとくデザインの優れた庭園であったことも事実である。

したがって前述したごとく、石田殿、伏見亭、平等院における景観構成の優秀さは事実であり、俊綱の選定にはある程度の客観性は認められるが、5者を比較した際に鳥羽殿が格段に劣っているとは断言できない。

以上の諸点から、俊綱が選定の基準とした「眺望」、「地形」の性格を、次のように定義付けることができる。

まず「眺望」とは、自然に形成された広大な水面と遙かな山並を、平面（自然水面）と立面（山並）との明瞭な対比関係として、高所からあるいは低所から180°の方向に俯瞰したり仰望したりすることであった、といえるであろう。

一方、「地形」とは「眺望」を確保する上での地形の高低差を指すのであり、また各々の別業内の地形の起伏をも指すのであろう。たとえば、高陽院は平安京の中心部に位置し広大な自然の水面に臨んでいるわけではないが、園池が寝殿の四周をとりまいていることや、園池の南にかなり幽邃な山が築かれて瀧が落とされていること、あるいは巨大な立石が組まれていることなどから、庭園内の「地形」はかなり変化に富んでいたものと想像される。俊綱が名園の第二にあげた所以でもあろう。また平等院も境内地に丘陵地形が諸処に存在し、「地形」の変化に富んでいたことが指摘できる。

さて、最後にこれらの庭園の政治、経済、社会的「立地」について言及しておきたい。「立地」は石田殿を除いて非常に優れているといえる。石田殿は園城寺北郊に位置し園城寺の住坊、あるいは別業としての立地はよいが、交通、交易の経路からははずれている。これに対して他の4つの庭園はいずれも、交通の要衝に位置し、別業の立地が果たす政治的役割には極めて大きいものがある。高陽院は平安京内の内裏にも近い中心部に位置し、里内裏としても利用されるほどの重要な邸第であった。また鳥羽、伏見、宇治には舟運の拠点となる津が存在し、平安京を難波、南都と結ぶまさしく交通の要衝であった。鳥羽殿、伏見亭、平等院は、いずれもこうした交通、交易の拠点を押さえる意味からも重要な機能を果していたのである。とりわけ鳥羽は、南都に対しては交通の便が良いが巨棕池・宇治川のさらにまだ上流に位置する宇治や、巨棕池の北岸中程に位置する伏見に比較して、平安京にも西国にも最も近い位置にあり、交通に関して最も好位置を占めていたといえる。それは、とりもなおさず白河上皇が院政を行うために造営した離宮の最大の立地条件でもあった。

以上のように、鳥羽殿と他の庭園・別業とを比較すると、俊綱が指摘した「地形」の変化や「眺望」という景観構成上の観点からは、鳥羽殿がやや劣るというものの際だった格差があるわけではなく、むしろ政治、経済、社会的「立地」の点では、鳥羽殿が難波津を経て西国諸国に通ずる平安京西南郊の玄関口、すなわち交通の要衝

に位置するという好条件を備え、他の4庭園よりも別業の存在そのものが果たす社会的機能においては優位にあった、といえる。白河上皇面前において俊綱が披瀝した彼の別業論・庭園論には、やや増幅の痕跡が認められるといっても過言ではない。

6. 小結

本研究で明らかとなったことをまとめると、以下のようになる。

1. 俊綱が別業選考の基準とした「眺望」とは、「居館や庭園から、広大な自然の水面と山並とを平面と立面という対比関係として180°遠望することができる」という意味であり、「地形」とは、かかる「眺望」を保証する庭園や居館の地理的な立地条件を指す。第一に挙げた石田殿、第三の伏見亭、そして『今鏡』の筆者が第二に推定する平等院は、いずれもこの条件を満たすものであった。

2. 同時に「地形」は、庭園内の地形の変化をも語意に含むものである。高陽院庭園は、敷地外の風景を広い範囲にわたって眺望することができないという弱みがあるものの、築山や園池、瀧など内部の装置が豊富で、地形の高低も変化に富んでいる。また平等院では、それぞれの堂舎が高低のある地形に立地していた。したがって、「地形」の語句は居館そのものの地形的な立地条件を指すとともに、居館内部の起伏をも語意に含むものである。

3. 高陽院は、「眺望」の点でやや難点があるうえに、水面も人為的に造成された園池であり、石田殿、伏見亭、平等院のような自然の池沼や河川のスケールにはとうていおおよぶべくもない。そういう意味からも、俊綱が第二に推賞した庭園は、『今鏡』も伝えるように、高陽院ではなく平等院であった可能性が高い。

4. 鳥羽殿は、庭園内に180°の眺望を確保する地形の高低がなく、周囲に立面として意識されるべき標高の高いスカイラインの明確な山並も存在しない。したがって、俊綱の挙げた「眺望」、「地形」の二つの基準を厳密に満たすものではない。俊綱の選に漏れた所以でもある。しかし一方では、鴨川、淀川の氾濫原ともいうべき広い水面に面する地形的な立地条件は他の庭園とも共通するものであり、『扶桑略記』にも詳しく記述されるように、細部の優れた庭園意匠からは当代屈指の庭園、別業であったことがうかがえる。それ故、鳥羽殿は他の庭園と比較して「眺望」「地形」の2点においてやや劣るとはいうものの、両者の間に格段の差を認めることはできない。

5. 鳥羽殿は、難波津と平安京とを結ぶ最短コース上に位置し、交通の要衝を占めている。

したがって、他の別業、居館と比較して、政治、経済、社会的立地条件の面では最も優位にある。

6. 以上の点から、俊綱の選考は僅差を増幅したものと

考えることができる。

それではいったい何故、俊綱はそのようなわずかな差をとりあげ、これをあえて増幅してまで白河上皇の面前において論断したのであるか。それは、2の研究の目的と方法でも触れたように、当時の社会における彼の政治的位置や、2人の間に交わされた会話の政治的背景を考察することによってより鮮明となろう。

(1990, 9, 28仮仮付, 1991, 7, 27受理)

註および引用文献

- 1) 今鏡：新訂増補国史大系21下：吉川弘文館, 1940。
(ふちなみの上 ふしみの雪の朝)「大殿[師実]のひとつ御はらなり。ふしみの修理のかみ俊綱ときこえし人もひとつ御はらにおはしき。その御は、[祇子]は贈二位さぬきのかみとしとをとおひぐし給へりければ。としつなの君御子におはしけれど。けざやかならぬほどなりければにや。なをとしとをのぬしのこの定にて。たちばなのとしつなとてぞをはしせし。後になを殿の御子とてふちはらになり給へりき。なをしなどきられけるをも、たちばなをしとぞ人は申ける。」
- 2) 宇治拾遺物語：新訂増補国史大系18：吉川弘文館, 1932。(巻三 伏見修理大夫俊綱事)「これも今はむかし。伏見修理大夫は宇治殿[頼通]の御子にておはす。あまり公達おほくおはしければ。やうをかへて橘俊遠といふ人の子になし申て。蔵人になして十五にて尾張守になし給てけり。」
- 3) 愚管抄：日本古典文学大系86：岩波書店, 1967 (巻第四 後三条)「宇治殿ハ具平親王ノムコニトラレテ、ソノ御ムスメ北政所ニテヲハシマシケレド、ツイニムマヅメニテ、御子ノイデコザリケレバ、進ノ命ブテ候ケル女房ヲヲボシメシテ、ヲノクノ御子ウミタテマツリケルヲ、イタクネタマセ給テ、ハジメ三人ヲバ別ノ人ノ子ニナサレニケリ。ハジメノ定綱ヲバ経家ガ子ニナサレニケリ。……ツギノ忠綱ヲバ大納言信家ノ子ニナサレニケリ。……第三ノ俊綱ヲバ讃岐守橘俊遠子ニナサレタル。フシミノ修理大夫俊綱ト云う名人コレナリ。」
- 4) 進命婦に関する説話は、『宇治拾遺物語』(巻第四 進命婦清水寺詣事)、『古事談』(第二 臣節 清水寺師僧戀慕進命婦事)、『愚管抄』(巻第四)などにみられる。
- 5) 尊卑分脈(三)：新訂増補国史大系60上, 吉川弘文館, 1961 隆姫の父は村上天皇皇子具平親王で、摂関頼通に嫁した由緒正しき正室であった。
- 6) 尊卑分脈(一)：新訂増補国史大系58：吉川弘文館, 1955
- 7) 森蘊：作庭記の世界：NHKブックス(カラー版), 日本放送出版協会, 1986
- 8) 太田静六：寝殿造の研究：吉川弘文館, 1987
- 9) 国歌大観(歌集編)：中文館書店, 1931
『詞歌和歌集』巻第三・秋
「橘としつなのふし見の山庄にて七夕後朝のこゝろをよめる 良暹法師
逢夜とは誰かは志らぬ棚機の
明る空をも包まざらなむ」
『後拾遺和歌集』巻一・春上
「俊綱の朝臣の家にて春山里に人を尋ぬといふ心をよめる 藤原範永朝臣
尋ねつる宿は霞にうづもれて
谷のうぐひす一こゑぞする」など。
- 10) 『今鏡』(ふしみの雪の朝)には、「雪のふりたりけるつとめて。俊綱がいたくふしみふけらかすに。」と前置きして、師実と師信とが雪の降り積もった朝に突然伏見亭を訪問したとき、俊綱は庭園を利用した種々の演出をしてもてなした、という説話が伝えられる。
- 11) 中右記(一)：増補史料大成9：臨川書店, 1965 寛治8(1094)年7月14日条「今夕入道橘俊綱卒去、年六十七、正四位上修理大夫近江守也、是依重病、近曾出家、及数十日、遂以非常、頭弁師頼朝臣、左京権大夫俊頼朝臣、為彼人養子」
- 12) 『今鏡』「ふしみの雪の朝」の章の冒頭には、「大将殿のほかの君達は。おほとくのひとつ御はらにをはしましき。大殿の御すゑこそは。いまに一人のつがせ給めれ。」とあり、以下この章の全文にわたって師実は「大殿(おほとの)」と呼称されている。
- 13) 西山恵子：大殿考：史窓36, 京都女子大学史学会, 1979
- 14) 公卿補任(一)：新訂増補国史大系53：吉川弘文館, 1938
- 15) 板橋倫行：日本古典全書 今鏡(解説文)：朝日新聞社, 1950
- 16) 『今鏡』(ふしみの雪の朝)には、「やすのりがたちにつかうまつるいしだと申家こそ寺もちかくて。…」とある
- 17) 本中 真：石田殿の立地について：造園雑誌51-(3), 1988
- 18) 師記：増補史料大成5：臨川書店, 1965
これに関しては、田中正大氏のご助言をいただいた。厚く謝意を表する。
- 19) 村山修一：比叡山と天台仏教の研究：山岳宗教史研究叢書2：名著出版, 1975
- 20) 福尾猛一郎：慈覚門徒と智證門徒の抗争について：園城寺の研究：園城寺, 1931

- 21) 比叡山延曆寺開創記念事務局：校訂増補天台座主記，1935『天台座主記』卷1には、「三十四世 法務大僧正覺圓宇治僧正 歷三箇日。……承保四年丁巳二月五日座主，宣命 年四十七，勅使少納言源基綱不能登山以下部捨置，宣命於講堂庭自賀茂河原帰了。同七日辞退。」と記す。
- 22) 元徳二年日吉社并叡山行幸記：群書類従巻3：群書類従完成会，1965
- 23) 梁塵秘抄：日本古典文学大系73：岩波書店，1965
- 24) 拾芥抄（中）：増訂故實叢書11：吉川弘文館，1928 諸名所部 第二十には「中御門南堀川東 南北二町，南一町後入賀陽親王家（高陽院御子家）」と記す。
- 25) 御堂閤白記（下）：大日本古記録：岩波書店，1954
- 26) 臈谷寿：十一世紀の高陽院について：平安時代の歴史と文学（歴史編），吉川弘文館，1981
- 27) 森蘊：寝殿造系庭園の立地の考察（奈文研学報第13冊）：奈良国立文化財研究所，1962
- 28) 太田静六：藤原頼通の邸宅高陽院に就いて 附作庭記との関係：庭園と風光23-(5)，日本庭園協会，1941
- 29) 扶桑略記：新訂増補国史大系12：吉川弘文館，1932 長暦3（1039）年3月16日条「十六日寅刻。高陽院焼亡。放火云々。嫌疑人叡山専當能法師遁避山林。因茲被尋求諸國。遂以捕得。禁囚獄中云々。」
- 30) 栄花物語（下）：日本古典文学大系76：岩波書店，1965
- 31) 小右記（六）：大日本古記録：岩波書店，1971
- 32) 賀陽院水閣歌合：群書類従巻181（第12輯）：群書類従完成会，1930
- 33) 左経記：増補史料大成6：臨川書店，1965
- 34) 春記：増補史料大成7：臨川書店，1965 長暦3（1039）年11月19日条には「又被仰云，隆祐，章信一日蒙閤白勘当，是依高陽院堀池事也……」とあって，焼亡後少なくとも8カ月後には改修にとりかかっている。
- 35) 『扶桑略記』天喜2（1054）年正月8日条「寅時。賀陽院焼亡。天皇移幸冷泉院。」
百鍊抄：新訂増補国史大系11：吉川弘文館，1929 『百鍊抄』同日条「高陽院焼亡。天皇渡御冷泉院。高陽院炎上。前瀧口紀近則放火云々。」
- 36) 新古今和歌集：日本古典文学大系28：岩波書店，1958 巻第18 雑歌下（1725）
- 37) 春記：増補史料大成7：臨川書店，1965
- 38) 太田静六：寝殿造の研究：吉川弘文館，1987
- 39) 『扶桑略記』承暦4（1080）年2月6日条「丑刻。高陽院焼亡。天皇駕花興。率爾入幸内裡。」
『百鍊抄』同日条「皇居高陽院焼亡。天皇入御内裏。」
- 40) 後拾遺和歌集：国歌大観（歌集編）：中文館書店，1931
- 41) 後二條師通記（上）：大日本古記録：岩波書店，1956 寛治3（1089）年6月15日条裏書「加陽殿造給事被仰，華山院播磨定綱給材木，私家被造材木進上殿下欺，……」
- 42) 中右記（四）：増補史料大成12：臨川書店，1965 天永3（1112）年5月13日条「亥時許休息，就寝之間人走来告云，當西方有焼亡，是皇居賀陽院之方也者，乍驚走出見之，火高，或已皇居者，……尋火根源之處，北對中程皇后宮女房退出之間，從曹局中火出来也……」
- 43) 後二條師通記（中）：大日本古記録：岩波書店，1956 寛治6（1092）年7月24日条「又參高陽院，右相撲人相具少將顯實，參，殿御坐寝殿内，召虹橋下，召相撲人御覧，脱如常，……」
- 44) 後二條師通記（下）：大日本古記録：岩波書店，1957 寛治7（1093）年正月1日条「未刻參高陽院，……殿下以下渡坤虹橋，厲行庭中……」
- 45) 『後二條師通記』寛治7（1093）年4月27日条「天晴，於高陽院有競馬事，……上達部等候御供，經西廊并池際虹橋了，……」
- 46) 『後二條師通記』寛治7（1093）年7月7日条「於高陽院和哥事，……於虹橋先有 絲竹事，……」
- 47) 『中右記』（大日本史料3-2：東京帝国大学，1927）寛治7（1093）年2月22日条。「于時中宮并閤白殿下共御高陽院也，又陽明門院密々同御之，西對未出来，仍以東對方為禮也，……」
- 48) 中右記（二）：増補史料大成10：臨川書店，1965 承德1（1097）年8月5日条「賀陽院西對并廊共近日為皇居被忽作間，一日上棟了，而為大風被吹僵，又如本諸国構立云々，」
- 49) 『中右記』承德1（1097）年8月2日条「被勘申賀陽院西對立直日時，件對一日棟上了，而依法皇仰俄被立直小寝殿也，是依皇居便歟，……」
- 50) 中右記（二）：増補史料大成10：臨川書店，1965
- 51) 本中 真：寝殿造住宅庭園における眺望行為：造園雑誌47-(2)，1983
- 52) 京都府伏見町誌：伏見町役場，1929
- 53) 雍州府志：増補京都叢書3：増補京都叢書刊行会，1934
- 54) 山州名跡志：増補京都叢書20：増補京都叢書刊行会，1935
- 55) 『扶桑略記』永承7（1052）年3月28日条。「左大臣捨宇治別業為寺。安置仏像。初修法華三昧。號平等院。」
- 56) 伊呂波字類抄：風間書房，1965 『伊呂波字類抄』（十）には，「平等院。永承七年三月廿八日癸酉。閤白左大臣頼通公。御年六十一。改宇治別業為寺 五

- 間四面。中尊大日東向。」と記し、続けて阿弥陀堂、法花堂、御塔、五大堂、不動堂の成立年代を記す。したがって、上記の「五間四面」とは本堂のことを指すのであろう。
- 57) 『扶桑略記』天喜1(1053)年3月4日条。「関白左大臣平等院内建立大堂。安置丈六弥陀仏像。……」
- 58) 『伊呂波字類抄』(十)「平等院……法花堂 天長(喜)四年十月廿二日壬寅供養之。……」
- 59) 『扶桑略記』康平4(1061)年10月25日条。「供養宇治平等院之塔。……」
- 60) 『扶桑略記』治暦2(1066)年10月13日条。「右大臣藤原朝臣師実。平等院内建五大堂。供養之。」
- 61) 『伊呂波字類抄』(十)「平等院……不動堂 延久五年供養。……」
- 62) 杉山信三：院家建築の研究：吉川弘文館,1981
- 63) 清水 擴：平等院伽藍の構成と性格：平等院大観，岩波書店,1988
- 64) 村岡 正：平等院の庭園：平等院大観，岩波書店，1988。村岡によると、宇治左岸の堤防は、文禄3(1594)年に豊臣秀吉が宇治川治水のために築いた槇島堤の一部が遺存し、明治時代に高く盛土したものと推定している。
- 65) 為房卿記：大日本史料3-1：東京帝国大学,1926
- 66) 後二條師通記(下)：大日本古記録：岩波書店,1958
- 67) 中右記(六)：増補史料大成14：臨川書店,1965
- 68) 兵範記(一)：増補史料大成18：臨川書店,1965
- 69) 都名所図会(巻5)：京都叢書第11巻：京都叢書刊行会,1934
- 70) 『後二條師通記』寛治2(1088)年3月5日条「(朱)上皇始御鳥羽北殿 雨降、飛羽殿北殿初御度也、……」
- 71) 『中右記』寛治4(1090)年4月15日条。「天陰、終日微雨、太上皇於鳥羽殿馬場、初有内競馬事、未刻許渡御馬場殿、……」
- 72) 杉山信三：院の御所と御堂——院家建築の研究——(奈良国立文化財研究所学報 第11冊)：奈文研，1962 杉山は、『中右記』寛治6(1092)年2月17日条「又、今夜太上皇還御鳥羽殿、是依新御所御渡也」や、同4月15日条「上皇未時許、御幸鳥羽殿、是依新御所御渡也」に記す「新御所」が泉殿を指す可能性のあることを指摘している。
- 73) 『中右記』寛治2(1088)年3月10日条。「還御了、次御鳥羽殿、有御乗船之興、」
- 74) 『後二條師通記』寛治2(1088)年3月10日条。「(朱書)還御儀次御鳥羽□儀」
- 75) (財)京都市埋蔵文化財研究所：増補改編鳥羽離宮跡 1984：1984
- 76) 鳥羽離宮跡：鳥羽離宮跡調査研究所,1972

summary : Toshitsuna-TACHIBANA was the suri-no-kami (director of Ministry of Construction) in 11th century. In the conversation with Emperor Shirakawa, he recommended 3 gardens except Toba-dono which was constructed by the Emperor. The criterions of his selection were both "geographical locations" of those gardens and "views" from gardens. The purpose of this study is to clarify the features of these criterions in result of the comparative study of those gardens.

The consequences of this study are as follows.

1. The view which was one of the criterions meant the wide prospect of the extensive natural water surface and the rear mountains.
2. The location meant the geographical features in which the gardens were constructed. They were able to get the wide prospect of natural water surface and mountains from there.
3. Ishida-dono, Fushimi-tei which were the first and third ranking in his selection, and Byoudou-in which was estimated as second choice for the second ranking according to "Imakagami" satisfy the criterions above mentioned.
4. The prospect from Kaya-no-in which was the first choice for the second ranking in "Imakagami", and prospect from Toba-dono which was not accepted were both rather inferior to 3 gardens.
5. Toba-dono located at the most important place as the villa residence in respect of political and economical activities of all.
6. The recommendation by Toshitsuna-TACHIBANA was on the basis of the objective differences in the prospects and locations of those gardens. But they were quite slight differences. Therefore, his recommendation included some overstatements.